

# 安心してできる地球後世に

ひと街キラリ

友人への近況報告のために一人で書き始めた新聞は、36年の間に読者が700人を超え、海外にまで広がった。「銀河のように多くの人に広がればいい」。亡き夫が「銀河通信」という名に込めた思いが現実のものになった。

2カ月に1回、A4判で

個人新聞「銀河通信」36年間発行

樋口みな子さん(75)



8ページを編集、発行する。内容は自然や原発、人権問題、戦争と多岐にわたり、書評と映画評も充実。自筆の原稿と寄稿で紙面を作る。子どもの頃から文章を書く

のが好きで、新聞記者を志した。しかし、大学受験がうまくいかず、医療系専門学校へ。臨床検査技師となり、東京と旭川で勤務した。札幌移住後の1988年、旭川で自然保護活動をしていた仲間に近況を伝えようと創刊した。

長男が生まれた86年に起こったチェルノブイリ原発事故を受けて、「安心して暮らせる地球を子どもに残したい」との思いが募った。自然環境と戦争の問題に紙面を割き、各地である市民運動に参加して記事を書いてきた。「記録に残されない市民運動が多くて、とてももったいない。こういう新聞があってもいいんじゃないか」と力を込める。特に印象深いのは90年1月の第18号。沖縄を訪れて戦争の爪痕と土地の多くを占める米軍基地について書いたルポは、労働団体や個人が新聞の出来を競う「全国新年号機関紙誌コンクール」で優秀賞に。

「参考にするものもない中、ずっと友人向けに続けていたけど、これでいいんだと力をもらった」と振り返る。11月に第242号を発行予定。購読料と寄付で運営するも、郵便料金が上がり、「いつまで続けられるか」と心配する。節目の第250号を目指す。節目の第250号を目指す。筆を執り続けている。

【片野裕之】

毎日新聞

北海道版 2024年11月12日(火)